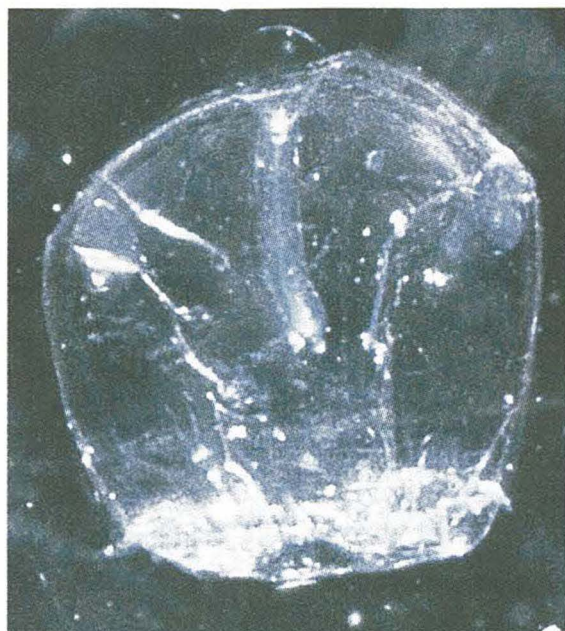


イロヌケクラゲ(新称)



透明できれいなイロヌケクラゲ

久保田 信

37



体長数ミもないごく小さな写真のヒドロクラゲには、まだ和名が付いていない。日本でも大変珍しい種類で、田辺湾からというか日本からはこの1個体しか採れていない。

種類は確定できており、学名は付いているので、種小名を訳して「イロヌケクラゲ」と和名をあてた。「無色透明なクラゲ」という意味だ。傘はしわくちゃになっているが、透明だったらガラスのようにきれいだろう。

だ。特徴は向かい合って生殖巣が計2個あるだけで、ソーセイジのような形をしている。画像の個体は小さいのでまだワインナーといったところだ。

すらりとした中央の口柄の上にならずかだがゼラチン質の柄が付いている。よく見えないが、体には8本の放射管が走っている。口柄の根元の胃袋で消化した餌を体全体に送る管である。傘の縁で光っているのは縁膜という円形の膜状のもので、傘の内部の海水の吐き出し口を小さくしてジェット噴射する装置だ。どのヒドロクラゲにもあるが、イロヌケクラゲではよく発達している。

傘の縁には多数の触手があるはずだが、採集中に傷んですっかり取れてしまっている。多いものでは48本もあるそう。イロヌケクラゲは硬クラゲ類に属し、この類は付着世代のポリプはなくて、受精卵から直接クラゲに発生する特徴がある。

(京都大学准教授)